

三味線声曲における
旋律型の研究

第一期分

合 綴

序

この研究は叙述の配列なども前後していて未定稿のまゝですが第一期分としてテキストが1〜8まで揃いましたので手持の分10冊だけを1冊に合綴いたしましたものです。

日本に三味線を伴奏とする歌曲が生れてから今日まで恐らく四百年の歳月を経ているでしょう。その間に幾つかの流派が時の流れに順応して興亡進退しつつも現在なお十種にあまる流派が存在しております。そしてこれらの間には何か共通した節の形というものがありはしまいかという事は私が三味線の声曲に興味をもち始めて明治の末年から古曲を初めた時から考えていたのです。それで大正10年に〈古曲保存会〉を起して三味線古曲の頒布レコードを作成した時解説として執筆した「江戸音楽通解」にも各流の固定旋律型を五線楽譜にして比較検討をやって見たものの極めて不完全で單にそうした意図を示した程度に過ぎませんでした。しかし判建約で歌謡主義の邦楽界で各流に渡って古曲を調査するなどということは狂気の沙汰で当時としては全く不可能なことで、只僅かに田中正平先生が着手

しておられて河東・一中・荻江の楽譜をそのお
弟子さんである山田舜平・西山吟平・落合三東
里女史の好意で内見させて貰う以上には殆んど
進捗せず、殊に地唄や義太夫節のような上方音
曲に対して半歩の研究をも進めることが出来ま
せんでした。それに当時の私としては生きるこ
とに忙しく、官府かと学校とか研究に便利な位
置もなければ金もない当時の境遇ではどうする
ことも出来ませんそれで半ば断念して昭和の10
年頃から方向を転じて民謡の採集の採譜の仕事
を始め柳田国男先生本の方々の庇護で昭和16年
からN.H.Kの「民謡大観」編集の仕事に従事し
たものの我々末期の悪条件の中に「関東篇」一
冊を上梓した中で中絶の憂目を見ました。そし
て終我となって昭和23年にN.H.Kの大観編集の
仕事が再開されるまでの約5年間は民謡採集の
旅にも出られず急遽凌ぎに東京で出来る仕事と
再び三味線歌曲の採集を始め義太夫節や地唄な
ども専ら師匠について少しく調べました。一方
民謡研究の方は昭和26年に「民謡大観」の「東
北篇」が発版されて以来N.H.Kの希望もありま
して引続き中部・近畿・中国・四国・九州各地
区を6冊続刊する予定の許にその仕事を進めつ

つあるので二足の草鞋は穿けず三味線歌曲の研
究は当然ストップいたしました。しかるにその
後の世の中の情勢は邦楽の研究に非常な光明を
与えてくれましたというのはテープレコーダー
の発明に次いで民間放送の開始によって資料蒐
集の上に非常な便宜が得られたのみならず文化
財保護委員会の創立等によつて楽曲資料の蒐集
が国家的規模によつて創められ無知の楽曲を尋
く知る機会を興えられたので10年前までは到底
不可能と思っていた三味線歌曲に対する全体的
な或る種の見通しが立てられるようになってき
たのです。しかし現在の私としては「民謡大観」
の完成に専念しなければならぬ義理があるので
その仕事を進めつつありますがこの仕事は資
料の整理に中々骨が折れて短月日では形がつか
ず、末年70才を迎える老齢の私には実際の所見
成するまでの健康の自信はありません。まアや
れるところまでやろうというのが現在の心境で、
従つて民謡採集を始める前から長い間心にかけ
て来た三味線歌曲の総合研究も結局は日の目を見
ないで終るであらうことを覚悟しております
た。しかるに丁度昨年の秋でしたか東洋音楽学
会から私に何か連続講座を設けるから研究を促

表せよとのお勧めがありましたので年来書き貯めて参りました楽譜類を整理するつもりで筆を執りましたのが本稿で御座います。しかし現在の私は民謡大観の中巻篇の下巻山、東海六果の編集に追われておりますのでそれが一般落つきましたらオニ期として平曲、舞曲、説経、衆文等の先行芸や、相の山、鉢叩き、ほそり、柴垣、投節などの流行歌、播磨、布勢、文殊、表呉、道呉屋、土佐等の古浄瑠璃の曲形を現存曲の中から考証して明らかにして見たいと考えております。

昭和31年10月

町田嘉章

岸辺用

昭和三十一年十一月十三日
第四十三回東洋音楽学会例会
日本音楽講座第一回

三味線声曲の旋律の研究^型

資料^(一)

町田嘉章著